

ば、「タウバ」とは、人が神へ回帰することであると同時に神が人をかえりみることであり、人と神との出逢いが目指される方向転換と解されよう。

仏教における「廻心」とイスラームにおける「タウバ」は、いずれも「悔い」に基づく自己の方向転換を意味する。ただしここで注目したいのは、その意味上の重なりではなく、他方あるいは神の側からのほたらきかけと、人間側の行為とが結びつくという共通構造である。この点をさらに具体的に言えば、人間の真摯な悔い改め、すなわち自己が否定し尽くされたところが、神や他力が臨む場所に他ならず、そこが新たな自己の肯定の起点となるという逆説性である。こうした自己否定即自己肯定という、合理的な把握を拒むような逆説性の只中にこそ、人間と神あるいは他力との出逢いがあると言えるのかもしれない。仮に宗教が、単に人間の営みのみによって成り立つのではないとすれば、この逆説的な出逢いが宗教の核心部分であると言つてもいいであろう。いずれにしても、歴史的に接触があったとは言いがたい、これらの宗教的な概念にさえ見られる構造的な共通性を、各宗教の根底で共鳴し合うような成立基盤を示唆するものとして考えたいのである。むしろ、こうした洞察を現時点でただちに普遍化するわけにはいかない。しかし、これをキリスト教の「コンバージョン」やユダヤ教の「シユブ」などを加えたさらなる比較研究の起点に据え、そこにより普遍的な宗教理解の可能性を期待することは許されよう。

ヘーシユカストの祈りににおける身体技法

袴田 玲

本発表は、十四世紀ビザンツ帝国のヘーシユカストを考察に取り上げる。祈りにおいて積極的・肯定的に身体を用いることが少ないとされるキリスト教世界においては特異な例と思しき彼らの身体技法について、「ヘーシユカスムの博士」と謳われたグレゴリオス・パラマスの釈義を通じて吟味し、祈りと身体の関係についての一考察としたい。

さて、当時のヘーシユカストは自らの修屋にこもり、独坐して頭を胸につけるように丸め込む姿勢をとり、呼吸を調整しながら「イエスの祈り（主イエス・キリスト神の子、我を憐れたまえ）」を不断に唱える、という祈り方を実践していた。

右記のようなヘーシユカストの祈りのうち、とりわけ「独坐して頭を胸につけるように丸め込む姿勢」についてパラマスがどのように思想的根拠付けを行ったかを眺めてみると、基本的にこの姿勢をとることによって目指されているのは「ヌースを身体の内（心臓）に送り込み、留める」ことであると分かる。

具体的にはまず、擬マカリオスに依拠しつつ、心臓が人間の身体器官の内第一のものであり、とりわけ思考と関わる器官であると捉えられる。そして、ヌースを心臓に導き入れることが励行されるのは、「静寂の内に身を捧げることを選んだ者たち」が「思考的な部分をしっかりと覚醒して吟味し、正す」ため

第4部会

であるとされる。

次に、坐つて頭を胸につけるように丸め込むことに関しては、聖書と擬ディオニシオス・アレオパギテースにその典拠が求められている。パラマスは、エリヤが「頭」を両膝に「もたせ掛けた」と記されている聖書の記述（王上十八・四十一）を持ち出し、ヘーシユカストの祈りの姿勢の範型とするが、その際、この姿勢をとることでエリヤは「神的なものに耳を傾けさせる」ことができた、と解釈される。また、祈るさいに視線を自身に向けるヘーシユカストたちは、「両目を天に上げようともせず、胸を打ちながら『神様、罪人の私を憐れんでください。』と祈り、義とされた徴税人（ルカ十八・九―十四）を指している」のだ、との主張が展開される。

さらにパラマスは擬ディオニシオス『神名論』第四章八、九節における「ヌースの円環運動」の概念を援用し、「これを通じてヌースは自分自身をも越えて時に神と一緒になる」(Triades 一一―一五「八五頁、一一―一四行」と述べる。神へと「登攀する」道行きが「内へ」の動きになっていること、すなわち、「上へ」の運動が「内へ」の運動に重ねられていること、そして自らの内で神と一つになるという発想には、マイスター・エックハルトや十字架のヨハネとの類似性も見出すことができる。

そもそも身体的姿勢によってヌースという非質料的なもの(より純粹で靈的なもの)に影響を与えうると考えられたのはなぜか。祈りや観想——そしてその果てに期待される人間の神化——に身体が与えることができる」とされたのはなぜなのか。そ

こには人間身体、ひいては人間に対するパラマスの肯定的なまなざしがある。パラマスにとって、そもそも身体は悪しきものではない。制御しがたい諸々の悪しき欲望が確かに人間には存在するが、しかしそれは身体そのものではなく、身体を動かすところの情念に起因するのである。そしてなにより、ヘーシユカスム論争においてパラマスが決して譲ることがなかったのは、靈的(非質料的)なものと身体的(質料的)なものとの、神と人間とのつながりがあるのだ、という主張だった。パラマスにとってヘーシユカストとは、「身体的な諸々の割符(シンボル)を通じて、ヌースにかかわるもの、神的なもの、靈的なものを刻印し、呼びかけ、迎える人々(Triades 一一―二十一「九七頁、一三一―一五行」)なのである。

野宿者の入信動機

——救世軍の事例から——

白波瀬 達也

釜ヶ崎およびその周辺部では、野宿者問題が深刻化した一九九〇年代後半から、キリスト教への入信を重視するプロテスタント教会による「ホームレス伝道」が活発に行われている。本発表で取り上げる救世軍西成小隊は一九九九年に食事や衣服の提供を伴ったホームレス伝道を積極的に着手し始め、十一年が経過した今日、毎週約八〇人の野宿者が礼拝に参加するようになった。しかし、彼らの教会への関わり方は一枚岩ではなく、